

残暑の候 宮崎県防衛協会 青年部会 宮崎支部会員の皆様には恙なくお過ごしのことと、大慶に存じます。

さて先月15日は「大東亜戦争終戦70周年」の慰霊祭が、宮崎県護国神社で厳かに挙行され、美しく改修された護国神社の前に県知事や県議会議長を始めご来賓、そして遺族会の方々などが猛暑の中、参列されました。

社前の天幕内の椅子の空席が目につき、40年以上前から参加されている人の話によれば、当時は境内どころか道路まで参列者が溢れていたそうですが、参列者減少の遠因はご遺族の高齢化もさることながら、ご英霊の犠牲により現在の平和と繁栄を享受する我々国民が、その慰霊や顕彰にもっと関心を持つことが必要かと考えます。

また23日は3年振りの富士総合火力展示演習を見学したところ生憎の曇天の上、22日の総合予行演習で10式戦車砲弾の何か？が最前列観客2人に当たり軽い怪我をしたそうで、本番前の中谷防衛大臣から異例のお詫びとご挨拶がありました。

さらに後段演習のフィナーレを飾る戦果拡張の中で、同戦車の履帯が外れると云うアクシデントも重なり、何ヶ月も掛けて訓練を積んできた自衛官の方々には「更に緊禪一番、事故の無きよう」、そして「炎天下の中、ご苦労様でした」と、叱咤及び御礼を申し上げたいと存じます。

また今月も小川和久先生のメルマガを掲載致しますが、平成25年6月23日産経新聞に掲載された当時の陸幕長人事劇を彷彿とさせるような内容ですから、是非ご一読賜れば幸いです。

・朝日新聞を利用した？ 悪い奴ら

7月23日号で以下の朝日新聞の記事を「朝日新聞の『虚報』の読み方」というタイトルで取り上げましたが、この記事が防衛省・自衛隊内に大きな波紋を投げかけており、権力とジャーナリズムの関係について考えさせられることが少なくない記事なので、その角度から考えてみたいと思います。

イラク派遣、危険な実態 宿営地に砲弾10回超

「航空自衛隊のイラク派遣の活動を記録した内部文書が16日明らかになり、陸上自衛隊の内部文書とあわせて総括の全容が判明した。自衛隊の活動を『軍事作戦』にとらえ、現地で自衛隊の車両を囲んだ群衆の中に銃を持った人物がいた事実などが記されている。政府が『非戦闘地域』と説明した自衛隊の活動地域で、自衛官らが危険な状況に置かれていた実態が明らかになった。▼3面＝虚構の『非戦闘地域』

内部文書は、陸自が2008年、空自が12年度にまとめた。イラク復興支援特別措置法では、派遣期間を通じて戦闘が起きる可能性のない『非戦闘地域』に限って自衛隊が活動すると定めた。陸自はサマワを『非戦闘地域』とした。

ただ、陸自の文書では、**宿営地には迫撃砲やロケット弾による攻撃が10回以上発生。宿営地外でも05年12月4日に、サマワ近郊のルメイサで『群衆による抗議行動、投石などを受け、車両のバックミラーが破壊された』**。この時、『隊員は、投石する群衆の他に銃を所持している者を発見』したという。第1次復興支援群長を務めた**番匠幸一郎氏**(現・西部方面総監)は、イラク派遣を『本当の軍事作戦であり、軍事組織としての真価を問われた任務だった』と総括した。

一方、空自の文書でも、『非戦闘地域』で輸送任務に当たった空自の航空機が『脅威下の運航であるにもかかわらず、同じ曜日、同じ時間、同じ飛行場へ定期運航を行っていた』と地上から狙われ、撃墜されるリスクを想定。『運航を不定期化し、攻撃される可能性の局限(限定)を図るべきだ』としている。(上地一姫、三輪さち子)(7月17日付け朝日新聞朝刊)

記事が「虚報」だったことは7月23日号を読んでいただければ一目瞭然なのですが、この記事が出て11日後の7月28日、発令された**防衛省人事**を見て防衛省・自衛隊の関係者、そして自民党の国防部会メンバーは息を呑みました。

やがて就任2年を迎える**岩田清文陸上幕僚長の後任候補**として、早くから下馬評に挙がっていた**2人の方面総監が揃って退職**となっており、**岩田陸幕長の続投**となっていたからです。

2人の方面総監とは、東部方面総監の**磯部晃一陸将**と西部方面総監の**番匠幸一郎陸将**。ともに防衛大学校24期生の俊英で、**イラク復興支援の最初の指揮官だった番匠さんを「本命」、**知将で米軍との密接な関係を構築してきた**磯部さんを「対抗」と見る向き**もありました。

それが、どちらも陸幕長に昇任することなく**退職**となったのですから、この人事を**不審**に思わない方がおかしいでしょう。

人事が発令された直後、私は**陸上幕僚監部**の中樞で勤務する陸将補と1等陸佐の数人に感想を求めましたが、一様に「こんなに最後まで情報が漏れなかった人事は珍しい」という点で一致していました。番匠、磯部ご両人に甲乙つけがたかったから、最後まで決まらなかったのかもしれない。

しかし、同時に「**あの朝日の記事がねえ…**」という感想でも、私が話を聞いた陸幕エリートたちの見方は一致しており、この要素を加えると防衛省・自衛隊内部の権力闘争など、**政治的な要因が次期陸幕長の人事に影を落とした印象**が生まれてくるのです。

朝日新聞の記事が**問題視**されたのは、7月23日号で紹介した「政府が『**非戦闘地域**』と説明した自衛隊の活動地域で、**自衛官らが危険な状況**に置かれていた実態が明らかになった」に関連する部分です。これについても、3か月に1回ほどの砲撃をもって「**戦闘地域**」とした**朝日の記事の認識不足**を指摘しておいたのですが、記事のような形で番匠さんの名前が出ることで、「**番匠陸幕長**」の芽が摘まれた可能性があることは否めないと思います。

おりしも**平和安全法制の国会審議**が参議院に移ろうかというタイミングでした。そんなおり、朝

日の記事で「(イラク復興支援は)本当の**軍事作戦**であり、軍事組織としての真価を問われた任務だった」という見方を示したとされる**番匠さんが陸上幕僚長**になれば、マスコミが飛びつくのはむろんのこと、**国会の参考人**に引っ張り出される恐れもあり、**逆風**を少なくしたい**政府・与党**としては「**番匠陸幕長**」の登場は避けたいとする心理が働くというわけです。

かといって、「**対抗**」とされてきた**磯部さん**を陸幕長にすれば**陸幕内部**で**異論**が噴出し、しこりを残しかねない。

そこで出てくるのが、喧嘩両成敗ではないですが、番匠、磯部ご両人をともに**退職**とし、**岩田陸幕長の統投**とすれば、陸幕としては望ましい展望も生まれてくるという見方です。

現在、自衛隊制服組のトップの**統合幕僚長**は河野克俊海将ですが、2014年10月14日に就任し、**来年3月**には在任1年半を迎えます。その後任に、**統投させた岩田陸幕長**をはめ込めば、陸海空が交代で務めている**統合幕僚長人事**が円満に決着し、陸幕が不利な立場に置かれることもない、というわけです。

そういう要素を含んだ人事は、過去にもあったと思います。しかし、問題は**朝日新聞の記事のニュースソース**です。私が話を聞いた陸幕のエリートたちは、朝日の記事が引用した**空幕と陸幕の内部文書**は**重大な情報漏洩**であり、**政治的陰謀**ですらあると受け止めていました。

なぜかという、平和安全法制の国会審議でも明らかになったように、同じ陸幕の内部文書は野党が情報公開法をもとに提供を求めても、大部分が**黒塗り**になったものしか開示されなかったほど、**秘密扱いの文書**だったからです。

ところが、**朝日新聞**には**黒塗りなしの内部文書**がリークされており、引用された箇所も普通なら**黒塗り**にされる部分だったのです。

黒塗りなしの内部文書を朝日に渡すほどの芸当が可能なのは、**防衛省の最上層部**あるいは**自衛隊制服組のトップレベル**しかないということで、陸幕のエリートたちは政治的陰謀説を口にした訳です。

ここで犯人捜しをするつもりはありませんが、このように**朝日新聞**はスクープとして**空幕と陸幕の内部文書**を**すっぱ抜いたつもり**でも、結果として防衛省・自衛隊内部の**権力闘争**に利用された可能性があるのです。

むろん、朝日新聞側が利用されるのはわかったうえで「スクープ」に飛びつき、結果として「**虚報**」してしまったこともあるでしょう。

このケースは、**権力とジャーナリズムの関係**を考えるうえで、重要な一石を投じているのではないかと思います。

以上

平成25年7月号の支部長通信にも「人事はひとごと」と書きましたが、将官とくに三軍の長ともなれば、本人の能力関係成しに様々な政治的思惑に振り回され、ポストが割り振りされるのかも知れません。

我々の如き下々の人間には預かり知らぬ事とは云え、やはり国益に添った適材適所の人事を日本の舵取りを担う方々にはお願いせねばなりません。

季語は立秋となり朝夕めっきり涼しくはなりましたが、昼間の日差しに努々ご油断など召されぬされぬよう、呉々もご自愛専一にお過ごし下さい。

平成 2 7 年 9 月 1 日

宮崎県防衛協会 青年部会 宮崎支部長 小倉 和彦